

# 暗い人

井上光晴

第一部

MITSU HARU INOUE

.....part 1.

MITSUHASHI INOUE

# 暗人

第一部

井上光晴

河出書房新社

# 暗い人 第一部

昭和六十三年八月三十一日 初版発行  
昭和六十三年十月二十五日 再版発行

著 者 井上光晴

装 幀 戸田ツトム

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―一二〇一(営業)  
四〇四―八六一一(編集)

振替口座(東京)〇―一〇八〇二

印刷 大日本印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

©1988 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります  
落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-309-00520-9

## 目次

|     |         |     |
|-----|---------|-----|
| 第一篇 | 赤光連の女たち | 5   |
| 第二篇 | 池島病院の憂愁 | 105 |
| 第三篇 | 馬の肉     | 163 |
| 第四篇 | 四郎一揆講   | 213 |



暗い人 第一部



第一篇 赤光連の女たち



## I 出島温泉

女たちの「館」を集めた出島温泉の廃墟が観光バスのコースになるのかと、朝里カイリは笑いを噛み殺すような気色で、青い小旗を持つガイドに導かれる一群の人々を見下ろしていた。棧橋に近い広場に停められたバスの中からゆつくりと地面に降り立った小柄な運転手は、帽子をあまりに被り直すと海の方へ歩いて行き、岸壁すれすれの場所で両手を高くいっばいにのばして背伸びをした。

つい半年前まで、そこには長崎の出島を模写した埋立地に、三十軒余のオランダ屋敷（ソープランド）が奇異さを競いあいながら、昼夜を問わず、それこそ遊覧バスで送り込まれてくる客を迎え入れていたのだ。琵琶湖畔の雄琴温泉を一回り小さくしたような規模と、雲仙岳の登山口近くに造成された新しい湯の宿だという立地条件で、ひと頃は九州の吉原などと喧伝されるくらいであった。〈万次郎〉という名のソープランドに、島原半島名物の馬刺しを昼食三十人分出前した話や、夜中にラーメンを二人前運んで一万円札の釣なしなどの噂が、さほど珍しくもなく飛び

交っていた。娼婦と半娼婦の出身地は函館から天草にまたがっていて、いちばん多いのは矢張り地元の長崎と、次いで沖繩であり、家郷の誰彼に毎月五十万円の送金はざらだといわれた。

女たちが旬日のうちに消え失せたのは、むろんエイズ抗体陽性者（キャリア）が出島温泉の中であつたつづけに三件発見されたせいなのだが、荒れた海辺で竹槍に背中を突刺されて即死したソープ嬢の事件も、大きな要因をなしていた。二十二歳になつたばかりの、〈小地獄〉所屬、源氏名増美は、夜明けに自家用車で帰る諫早市の常連を送りにでた帰途、防波堤に打寄せる波濤にしばし心を安めたいとでも考えたのか、渦へ通じる石段を降りようとする矢先、直径三糎もの竹槍で背後から襲われたのである。エイズ発生後、推測と中傷にまみれた噂が流れはじめて、いくらかも経たぬ日の出来事であつた。しかも、被害者の女性キャリアとはまったく無関係だつたのだ。平べつたい石段をしばらく歩いて、閉じられた食堂脇の狭い通路を抜けると、朝里カイリはかつての駐車を横切つた。太極拳風の動作を繰返す運転手と、何となく話をしてみたくなつたのである。近寄つてみると、思つたより年をくつた運転手は、体の動きを止めた。

「あんた、出島温泉の人ね」

「いいえ」

「そうやろうな。あんたみたいな人が、まだ出島温泉に残つとるなんて、考えられんもんね。いやあ、びつくりした。これは何か、復讐しにおれを刺しにでもきたのかと思うた」とい

「何を復讐するんですか、あたしが」

「あんた、島原の者じゃなかやろう。言葉つきの違ふとるけんね。……何処からきなさつたと」

「北海道の釧路です」

「いやあ、釧路といえばあんた、北方領土の問題がどうしたとかいいよる、あの釧路じゃなかとね。日本の果てたい、そりゃあ。そこからまた何をしにきなさったと」

緑のペンキで胴体を塗りたくった繫柱に腰を下ろした運転手は、二つの短い足を突っ張るような恰好で揃えた。

「復讐の意味を教えてくださいませんか。さっきそういわれたから」

「ああ、その話ね」運転手は顎と首の辺りを片方の手でなでさすった。「釧路からこらしたとなら、知らんとも無理のなかないね。去年の暮やつたかな、それも押し詰った日の朝方、まだ暗かうちに殺人事件のあったとよ。ついこの先の、いくらか離れとらん場所たい。それも並の殺人じやなか。ソーブの女があんた、竹槍で突き殺されたと同じやけんね。……」

「その事件なら知ってます。此処にいましたから」

「なんや、知つとるとなら説明することはなかない」運転手はがっかりしたように声の調子を落とした。「殺された女の身内か仲間内かが、敵討にきた。……おれが復讐というたとはそがん意味たい。誰もおらんと思うとる場所に、若い女のひとりであらわれよったものやから、たまげたとよ」

「それでも、あなたが犯人じゃないでしょう」

「半分は冗談でそういうたとよ。本気で復讐しにきたなんて、誰が考えるもんね。犯人ならなおのこと口にはださんとやろうが。釧路からきたとかいいよったが、あの辺の人はみんなそがんふ

うに、言葉を生真面目に受取るんね」

朝里カイリは何もいわず、沖合いの白い波浪に見え隠れする二隻の漁船を目で追った。よほどの季節風に見舞われぬ限り、静かな海面を横たえる橘湾がこんなに荒れるのは珍しく、幾艘か碇泊する石油備蓄船の船影もまるつきりかすんでいる。

「きいちやいかんのかも知らんばってん、釧路からこげん遠かところまで、何しにきとるんね。

……そうかそうか、旦那さんの転勤か何かで、それでついてきなさったとやろう」

彼女はそれにも答えずに、別のことをいった。「沈みながら走ってるみたい。船に乗ってる人、恐くないのかしら」

「商売商売だから、恐いと思ったら何もやれんよ」運転手はいった。「無暗やたらに飛びだしてくるバイクなんかのことを案じとったら、ハンドルなんか握っておられんもんね」

遅い午後の陽を遮る端切れに似た雲がようやくひろがって行き、しめった潮風が髪を濡らすので、彼女は運転手に頭を下げようとした。すると、相手の口から鉤のついたような言葉が放たれたのだ。

「殺されたソーブ嬢には、かなりの常連がおって、最後の晩に泊った客は、諫早の歯医者だったとよ。……」

彼女の足が止まったので、運転手の声には一層、張りがついた。

「ソーブ嬢の名前は何といいよったかな。そうそう『小地獄』の増美。……今もいうたように、増美についとる常連は十五人ばかりおって、そのうちの四人がまた特別の常連らしかったとよ。

諫早の齒医者者は四人のひとりやつたとばつてん、この男がいちばん怪しかったとたい。なぜ怪しいかといえ、警察にきた投書から発覚したとたいね、それが。……いくら調べても埒のあかん時にそれが舞込んだものやから、よろこんだのはよろこんだらうが、一方じゃ、それまでの追及が手ぬるいという声もでつたとよ。それで、投書から判明したことといえ、その齒医者者は増美という女から三百五十万もの大金を借りつたとよね。増美からばかりじゃない、ほかのソーブ嬢からもあつちこつちと借りつた。その手口がみんな色仕掛け。ソーブの女に色仕掛けもなかるうと思うかもしれんばつてんね。ソーブで働いとる女の方がかえつて甘い言葉にはころつといかれるらしかとよ。甘か言葉というても、あんたを好いとるとか、きれいかねとかそんなふうな宙に浮いとるものじゃなくて、結婚という中身のつまつとるものたい。それも何時か結婚したかね、とかぼんやりしたものじゃなくて、来年の五月に所帯を持つとか、はつきり、具体的にいわんと効果のなかとよね。それをきいた時、なるほどと思うたばつてん、おいたちはもう後の祭りたいというて笑うたとよ。……」

細い鼻と唇のあいだが並みより狭いので、そのせいかどうか、運転手の声は妙にねばつこい。「西川とかいう齒医者にソーブ嬢の増美がなんでいかれたかといえ、ちようどその時分に奥さんとの離婚が成立して、口説きの文句に実があつたとかじゃないかというつた。離婚したての男なら、誰でもひつかかるとたい。……」

「竹槍の犯人は齒医者と関係してたんですか、それで。……」

「いや、それがどうもおかしな按配になつたとよ。警察に拘留もされとらん者をクロ呼ばわりす

るのは、それだけで人権蹂躪だといひよるしね。竹槍殺人のわりには警察の動き方もあんまりぱつとしやらんし、諫早の飲み屋じゃ今、その話で持ちきりたいね。……」

「三洋観光バスって、諫早なの」彼女は話の鋒先をかえようとした。

「本社は長崎、おれは諫早勤務。……」運転手はなぜか、濁った声をだした。

「ききたいんだけど、いいですか」

「どうぞ」

「バスに乗ってきた人たち、雲仙か島原の観光が目的なんでしょう。それをわざわざ、出島に寄るその意味がよくわからないの。……あたしは今日初めて見たけど、観光ルートの中に、組み込まれているんですか」

「どっちでもよかことになるとよ、会社の方針はね。客の方で出島を見たかといえ、時間の都合で、そうしてもよい。まあそういうこと」

「今日のお客が、出島を見たいと希望されたわけですね、それじゃ」

「人気者やからね、今日のガイドは。……おもしろおかしくエイズや竹槍事件の話をして、そいじゃ是非ともということになったとよ。こっちもちやうど、時間の調整をする必要のあったしね」運転手の口調は弾みを取り戻した。「出島に寄ってお客さんによるこぼれるかどうかは、まあガイドの腕一本にかかるとるとたい。いくら昔はやつとったソーランドというても、見た目にはがらんとしとるだけやからね。話のおもしろうなかつたら、なんねこれは炭鉱の町とおなじたいといわれて、どう仕様もなかごとなる。そこをガイドのアジテーションで、珍しかところに

連れてきて貰うてよかったというふうに持つて行く。出島の事情をうまいとこ話しきるガイドはなかなかおらんとよ。三洋観光にまあ、二人か三人かな。竹槍事件をひっかけて喋れば、誰でもそこそこに行くような気もするが、エイズの黴菌のあつちこつち残つとるんじゃないかと客に冗談いわれて、すばつと引つくり返すようなギャグをいえるまでには、なかなか年季のかかるとよね。……」

彼女がぼんやりしていると、運転手はぐいと顎を上げた。

「今度はこつちがききたかとばつてん、ほんとにあんたは何処に住んどると」

「中浜ですよ」

「中浜温泉ね。……そいでご主人がホテルにでも勤めとんなさると」

「結婚していませんから、あたしが働いています」

「へえー、あんたは独身ね。よっぽど事情のあつたとばいね。釧路からわざわざこげんところまできて、働いとるんは」

彼女は黙つてセーターの袖口にくつついている草の実をつまんで捨てた。

「仕事休みというわけたいね、今日は」

「ええ、交替で休みを取りますから」

「休みの日は大抵、長崎に行くんじゃないかね。誰もおらん出島をひとりで歩いとるとだから、矢張り釧路からきただけのことはあるとたい。……皮肉じゃなかとよ。なかなかしゃれとるという意味。……」

「さよなら」朝里カイリはいった。すると運転手は繫柱から腰を浮かし、一瞬懇願するような響きを含む口調で「竹槍事件の真相を知りたかと思わんね」といった。

「さっきさきました」

「いや、歯医者の話は上辺だけのことたいね」運転手はふたたび腰を落として手招きした。「現に、西川医師は重要参考人ともならず、逮捕もされとらんのだからね。いくらソーブ嬢から借金しとったといっても、犯人と結びつけるのは無理な話やろう。……」

先程の話をまるつきり裏返すような声で、運転手は喋った。

「見ず知らずの者にぎりぎりの真相を話すわけにはいかんけんねえ。あんたははつきり中浜のホテルで働いとるというてくれたし、釧路からきたこともわかつとるとやから、これなら大丈夫と思うたよ。……あんたも腰をかけるとよかたい、そこに」

このままでよいという素振りを彼女はした。見ず知らずの者と何処が違うのか、と胸内で苦笑しながら。

「半年も経つとるのに竹槍事件の犯人はまだあがつていない。これははつきり警察の黒星やからね。それでもこれだけの生々しか殺人事件を警察が黙って見過ごしとるはずもなかやろう。矢張りやるだけのことはやつとるわけ。それじゃ何処までやつとるかということになると、これは秘密。水面下といひよったかな。水面下の足は激しゅう動いとるんだから、表面は波立たずに見えても、かけられた網はだんだん絞られてきよるらしか。どうして僕がそこまで知つとるかといえ、捜査本部関係に同級生のおるとたいね。諫高を知つとるね、諫早高校。諫早じゃちよつとし



た進学校になつとるばつてん、そこで僕と同級生だった者が、事件を担当しとるとよ。大きな声ではいえんが、同級生というのは矢張り特別の間柄やから、何とはなしに事件の調査がどの辺まで進んだのか、キャッチできるとよね。はつきりどの線まで進んだのか、そんなふうに教えてくれるわけじゃのうても、口裏でつかめるとたい。……そいでもって、竹槍殺人の捜査網がどの辺まで絞られとるかといえは、西川医師の話なんか、あれは子ども騙しみたいなもので、鍵はほかの常連が握つとるんじゃないか、といいよつた。常連というても四人の中じゃなくて、ほかの客。この男は事件のあと、すぐ沖繩に旅行して、そいで今何くわぬ顔して、大村で商売しとるんよね。この男が実際に竹槍を突刺したんじゃないくて、何ちゆうのかな、黒幕と犯人のあいだの橋渡しと考えればよかとよ。……事件は単にソーブ嬢ひとりを目当てに殺したというんじゃないくて、出島温泉全体を爆破する目的をもつてなされた。その証拠に竹槍事件が導火線となつて女たちは一斉に逃げだしたとだからね。それじゃ誰がそうさせたか、ということになるわけやろう。出島温泉を何者がそこまで敵視しておつたのか。エイズ患者が三人もでたのに関連して推測すると、想像もせんような顔のあらわれるかもしれんとよ。……」

運転手の視線が揺れたので、朝里カイリはそれに従つて目を移した。赤い自転車の男が喘ぐやうな息遣いをして、ペダルを止める。紺のトレーナーを着ていたが、皺の浮いた顔は明らかに老人のものだ。

「あなたにききたかとはつてん、あのバスは加津佐を通らんとね」  
「加津佐は通らんとよ。中浜経由の雲仙泊りになつとるけんね」